「ルーシー」は命令られた通りに、大事を取つて歩いて來て、池を瞰くと、金色の鏃とも見えるものが、水の中をツー〳〵行くのであつた。之は河蛇といふものだと「トム」が敎へたので、蛇でも泳げるものかと「ルーシー」は感心しながら、その體のうね〳〵する樣を眺めた。「マギー」は次第〳〵に近く寄つて來た。……「トム」が自分に見せやうともしないから、愉快な事はちつともないが、是非見るだけは見なければならないので、「ルーシー」の近くまで來ると、「トム」は「マギー」の動作を氣が付きなから默つて居て、愈々といふ時になつて、くるりと向き直つて、

ト「彼方へ御出でマーさん！　草の上にはあなたの來る席はない。誰も來いつて言ひもしないのに」

と言はれて、「マギー」は憤りの餘りに少さい腕を精一杯突き出して人形のやうな「ルーシー」を牛の踏み躪つた泥の中へ、押し落して仕舞つた。「トム」もさすがに堪忍袋の紐が切れて、「マギー」の腕をぴッしやり二つ敲いて、急ぎ走せてメソ〳〵泣いてゐる「ルーシー」を抱き起した。「マギー」は二三間彼方の樹の根方まで退いて、悔む氣色もなく見てゐた。常ならば先方見ずな事をするが早いか、後悔するのに、今日は「トム」と「ルーシー」の仕打が染み〴〵惡くて、二人を苦あたり、人を困らせたりするのが快く思はれた。氣の毒の事何ぞちつともありはしない。いくら自分が惡かつたと思つたつて、兄さんは、容易に勘辨して呉れる事ではないからなど丶考へた。

「トム」は「ルーシー」を連れ去りながら、力を入れて大きな聲で「マギさん僕は母さんに言ひますから」と言つた。告げ口をするのは「トム」の癖ではないのだが、此際は「マギー」が非道い罰に逢ふのが、當然だと考へたからで。「ルーシー」は奇麗な衣服が汚れて、身體が濡れて、泥塗れで心地が惡いのに氣を取られて、何の故でかうなつたとも思ひもしなかつた。縱令、考へたところで解りも

しなかつたのだろう。自分が何をして「マギー」が腹を立つたのだか知らないが、「マギー」は不親切な厭な事だと唯思つたので、母親に言ひ付けぬやうになど、、度量宏く「トム」に懇願してやるでもなく、シク〳〵泣きながら「トム」と連れ立つて行くのであつた。して「マギー」は樹の根方に座つて二人の後を恐い〳〵顔をして見送つて居た。

「トム」は臺所の入口へいつて「サリー(女中の名)マギーさんが、ルーさんを泥の中へ突き落したと母さんにいつて來て御くれ」といつた。「サリー」は口にパンを一缺片入れ、手にパン燒串を持つた儘言葉も出さず瞠若とられて眺めて居たが、

サ「まあ! 如何して、そんな泥のある處へいらつしつたのですか」と澁面を作りながら、身を屈めて汚れた「ルーシー」を檢査した。

「トム」は此事の成行きを種々想像しては見たのだが、「サリー」の此言葉までは考が、敏活に廻らなかつたので、今言はれて始めて、その及ぼす影響を感付いて、「マギー」ばかりが罪人にはならぬと思つたから、「サリー」が事實を何とでも推量するに任せて、自分はそつと臺所の戸口を離れ去つた。

で、「サリー」は、前述のやうに、時を移さず客間の入口へ「ルーシー」を連れていつたのである。

アッ! と聲を上げた後で「プレット」伯母さんは、

プ「あれまあ、入口の處へ立たせて御置き。油布の外へ踏み出させては駄目だよ」と叫んだ。

「マギー」の母親は「ルーシー」の母親に對する責任があるので、衣服がどれ程惡くなつたかと、「ルーシー」の傍へ寄つて、

「何處の泥の中へ落ちたのですよ。」と云ふ。

サ「あの奥さま。マギーさんが御突き落しになつたのですと、トムさんがいらつして仰つてゞした。必然皆さん池へいらしつたのでせうよ。こんな泥は他所には御座いませんもの」と「サリー」が

言ふ。

プ「それね、今言つて居た所でせう。あなたとこの子達ですよ！　あの子達はどうなるか末が分らない」と「プレット」伯母さんは豫言めいた事を哀つぽく言ふ。

「マギー」の母親は、眞から情ないと思つて、默然として居た。而して、例の通り心の中では、子供がかう厄介を掛けるやうな事をするのは、必然、自分が何の惡い事をした報だと、世間では思ふだらうと考へて居た。「プレット」伯母さんは、「サリー」に、泥の始末を付けるのに他を汚さぬやうに、注意してなどゝ、口喧しく指圖をしてゐた。其内に夕食の時刻になつたのだが、惡い予供二人は、不面目にも臺所で食べよとの事であつた。「マギー」の母親は、二人とも臺所に居る事と思ひ込んで、小言を云ひに出掛けたところ、何方も居ないで、やう〳〵尋ね當てれば、「トム」が唯一人强意地の、どうともなれといふ氣色して、禽小屋の圍ひに寄り掛つて、七面鳥を怒らせやうと、糸を圍の中へ垂らしてゐた。

母「トムや、お前は眞に不良い子だ！　マギーは何處に居るの」と母親は情けなさゝうな聲でいふ。

ト「僕知りません」と「トム」は答へた。「マギー」を充分懲らしてやりたいと思ひ込んだ初一念も、よく考へて見たらば、自分の行爲が其と共に、非難せられる事に是非ともなるので、いつの間にか薄らいで居た。

母「だつて、お前何處へあの子を置いて來たのさ」と母は、四方を見廻しながら言ふ。

ト「池の所の樹の下に座つて居ました。」と言ひながら、「トム」は糸と七面鳥ばかりに、氣を取られて居る風をする。

母「いつて直ぐ連れていらつしやい。眞實に不良な子ですね。何だつて池へ行かうなんと思つたのあんなに泥のある處へ妹を連れていつてサ。あの子は何か惡戯の材料さへあれば、必然するの

をお前も知つて居る癖に。」

「トム」は何か不都合があると、其不都合を何とかかうとかして、「マギー」に押被せるのがこの母の癖であつた。だが、「マギー」が一人で池の邊に居ると思つたらば、急に例の心配が始まつて、母は、娘の姿を見て安心しやうと、急いで馬乘り臺へ登つて見た。「トム」は「マギー」の居る方へと歩き出したが、急ぐ體には見えなかつた。

母「うちの子は水に祟りさうな子供達だから」と四邊に聞いてくれる人の無いのにも心付かず聲高に「何日かきつと溺死して擔ぎ込まれるだらう。あゝ！　河がもつと遠くだと宜いに」と言つてゐた。

「マギー」の姿らしいものも見えず、「トム」がやがて一人で戻つて來たので、今迄は空に漂つてゐた心配が、俄に心の中一杯に蔓延つて、母親は足を早めて「トム」を迎へた。

ト「マアさんは、池の邊に何處にも居りませんよ。母さん。何處かへ行つて終つたのでせう」と「トム」は言つた。其から大心配で、「マギー」を搜索するやら、池の中には大丈夫居ないと母親を說得するやら、ブ伯母さんは、あの子は生き延びればもつとひどい死に方をするだらう。末は知れたものでないといふ、ブ伯父さんは夕食の時刻が後れ、人の往來が烈しくて禽が驚駭したりするなどの異常の光景に、氣が顚動してしまつて、「マギー」を搜索するのだとて、草取鋤を持出したり、禽小屋に居さうだとて、其所の鍵を手を伸して取るやらしてゐる程に、「トム」が「マギー」は自宅へ歸つたのだとふと言ひ出した。（此のやうな場合に、自分だつたらさうすると說明する必要もないと思つて）

母親は、其を賴りに、少し安睹する體であつた。

母「どうぞ馬車を用意をして、宅まで私を送らせて下さらないか。あの子が途中に居るかも知れないし、「ルーシー」はその體では歩かせるわけに行きませんから」といつた。罪なくて犧牲にせられた「ルーシー」はショールに包まつて素足で、

長椅子の上に座つて居た。

プ伯母さんも、早く自宅を片付けて、落付きたいと思ふ矢先なので、すぐ同意した。「マギー」の母は、やがて馬軍の中から氣遣しさうに目の達く限り遠くを望んでは、萬一「マギー」の行方が知れなかつたら、父親が何と言ふだらうと其のみを考へて居る。

*　*　*

「マギー」の計畫は、「トム」が考へたのよりも大袈裟で、「トム」と「ルシー」が歩み去つた後に、徐ろに意を決したのは、自宅へ歸ろう位の事でなく出奔して「ジプシー」（一派の無賴民で盜賊と占補錫等をして生活する徒）の處へ行つて、兄さんと二度と顏を合はさないやうにしやうといふのであつた。ジプシーの處へといふのは、「マギー」の俄の思ひ付きではないので、自分が始終ジプシーに似て居ると言はれるので、屈辱を受けた時だの、世の中が思ふやうに行かぬ場合には、ジプシーの處へ行くより他に方法はないといつも感じた。して行きさへすれば、ジプシーは必ず歡迎してくれて、自分の博識を敬つて吳れる事とマギーは思つて居た。「トム」にこの事を話して、いざ顏を褐色に染めて一所に出奔しやうと勸めた事もあつたが、「トム」は、一言の下に撥付けて、ジプシーは盜賊で、ろく〳〵食物もなく、只驢馬だけを連れてゐるものだといつた。

今日のこの腦みは、只もうジプシーに行くより他に免れる途はないと思ひ込んで、マギーは生涯の一大事との覺悟で、樹の根元から立ち上つた。眞直に走つて行けば、「ダンロー、コンモン」といふ廣地へ出る、其處へさへ行けば、ジプシーが居るから、其仲間へ入つて、「トム」だの親類だの自分の缺點を探す人から、隱れて終うと、思ひ〳〵マギーは走り續けた。併し父の事が氣に掛るので「よし〳〵、ジプシーの子供に、密かに父の許へ、手紙を持たせてやつて、何處に居るとも知らせず只無事に日を送つて居るから安心して下さい。父

上の事は懐かしく思つてゐますと傳へてもらふ」と取り定めた。

「マギー」は走り走つて、野をいくつか拔けて、やつとその先の道へ出ると、半圓の黑テントが見えて、其處から炊事の煙が立ち上り、ジプシーの妻とも見ゆる女が、テントの前に居た。「マギー」は想像したのと違つて、ジプシーが往來に陣を取つて居るのが案外で、實際に來て見れば、なんだか詰らないやうに思つた。ジプシーの女の方では「マギー」に目を止めて、赤ン坊を抱いたまゝそろ〳〵歩み寄つて來た。「マギー」が怖る〳〵見ると「プレット」伯母さんや、皆が、自分をジプシーと呼ぶのも道理だと思ふ程、此の女の黑目や、黑い毛髮が、鏡で見る自分のゝによく似て居た。

ジ「御孃さん、何處へ御出になりますの」と、ジプシー女は媚びるやうに恭しく言葉を掛けた。

豫て心に畫いてゐた通りなので、「マギー」は嬉しくて堪らず、ジプシーは一目で自分の御孃さんであるのが解つて丁寧に取扱ふのだと思つた。

マ「もう之から先へは行かないの。あなたの處へ來たのですよ。」と「マギー」は夢の中で演習しておいた事を、實際の場になつて言つてゐるやうな氣がした。

ジ「まあ、其はよろしう御座いますね。では、いらつしやい。なんて可愛らしい御孃さんでせう」と言つて、ジプシーは「マギー」の手を曳いてくれるので、「マギー」は心の中で御愛想の良い女だが此のやうに汚くないと可いにと思つた。

テント内の焚火の周圍には、大勢人が居た。老婆が一人膝を抱へて坐つてゐて、時々鍋の中を燒串で突き廻すので、其度に厭な匂が立つた。ムシヤ〳〵髮の子供が二人肱枕で寐そべつてゐると、背の高い娘が仰臥に仆れてゐる上には、穩順しさうな驢馬が首を延べて居る。それを娘が調戯つて鼻を引搔いたり、草を食べさせたりしてゐた。夕日が、斜に此一群を照したところは、中々に美し

いと「マギー」は心に思ひながら、同じくは、此人達が、早く食事にすれば宜いにと願つた。而して今に、此人達に、顔や手を洗ふ事を敎へ、書物を讀む樣にしてやつたらさぞ愉快だろうと考へた。併し若い方の女が、老婆に對つて、何か聞き分けられない言語で饒舌り出したり、驢馬に草を與つてゐた娘が、起き上つて、挨拶もせずに自分を熟視して居るのは、氣持よくなかつた。やがて、老婆は「マギー」に對つて

「美しい御孃さん。玆へいらしつたのですつてね。さ、御掛けなさい。何處から御出たのですか」と言つた。全然御伽話にあるやうで、「マギー」は美しい御孃さんと呼ばれて、好遇されるのが氣に入つて、坐に着きながら、

マ「自宅が不快だから出て來たの。私もジプシーになるの、而して、皆と一所に暮して、私種々な事を敎へて上げてよ」

「御怜悧な御孃さんね」と若い女は赤子を下ろして、這ひ廻らせながら、「マギー」の傍へ來て「美しい御召に帽ですこと」と言ひながら、「マギー」の帽子を脱がせて、其を眺めては、老婆と何か言つてゐた。背高の娘は、急遽に帽子を引奪つて後前に被つて、ニヤ〳〵笑つてゐた。マギーは惜しさうな風を爲まいと努めて、

マ「私、帽子なんか被りたくはない。あなたのやうな、赤いハンケチを卷いてゐた方が宜いワ。私の髪は、昨日迄長かつたのですよ。でも切つてしまつたの。今に直に伸るわね」と申譯らしくいつた。ジプシーは必然長い髪が好きなのだろうからジプシーに嫌はれまいとの一心で、マギーは空腹な事も忘れて、辯解した。

老「好い御孃さんね！ 御金持で——御宅は立派なのでせう」と老婆がいふ。

マ「エ、宅は奇麗よ。而して河があつてね。よく其處へ魚釣りに行くの。でも時々自宅が厭になるの。宅から本を持つて來ると宜かつたのですが、

急いで來たものだから。でも本の中の事は何でも話せてよ。幾度も〳〵讀んだから。面白いのよ。地理の事だつて話して上げられるわ。地理つて、此世界の事が書いてあるの。面白くて利益になりますよ。コロンブスの話を聞いた事あつて？」

「マギー」の眼は生き〳〵と活氣を帶びて、頰には紅が射して、自分の氣では、ジプシーを教育しかけてゐる積りでゐる。ジプシー達の方では、若い女が「マギー」に氣取られぬやうに、その衣袋から中身を持ち出してゐるのに注意を奪はれながら半はマギーの言種に呆れてゐる氣味であつた。コロンブスと聽いて、老婆は

「あなたの御宅のある處ですか」と尋ねた。

マ「さうではないの」と哀れむやうに「コロンブスといふのは、偉い人で、ソレ世界を半分發見したので、鎖で繫がれて、非道い目に逢はされたの。うちの地理問答にありますよ。だけれど御飯前には話し切れない……御飯が欲しいと」我にもあらず先生振りの口調から泣き聲に換はつた

女「あれ御腹が減つて居るのでせう。御可哀いさうに。何か冷肉でも上げませう。隨分御歩きだつたのでせうにね。御宅は何處」と若い方のがいふ。

マ「ドールコット、ミルツていつて遠い處。でも御父さんに私の居處を知らせては不可いのよ。迎へに御出になるから。ジプシーの女王は何處に居るの」

女「エ、女王の處へいらつしやりたいの、御孃さん」と若い女が言ふと、背の高い娘は、「マギー」を熟と視ては、ニヤ〳〵笑つていかにも不行儀な子であつた。

マ「イーエ、唯ね、若し不良な女王だつたら、其人が死んだ時に皆が喜ぶだろうと思つて。而して他の人を女王に選べるわね。若し私がなれば、良い女王になつて皆に親切にして上げてよ。」

老「それ、之を召し上がれ」と老婆は干乾びたパン

の一塊と、鹽豚の一片を出した。「マギー」は手にもせず、見ただけで、

マ「有り難う、之でなくパンとバターと御茶と頂戴。鹽豚は、私嫌ひ」

老「御茶だの、バタだのと云つてもありません」と、老婆は、御機嫌を取るのも倦きたといふ風情で、不興顏をする。

マ「では、パンと糖蜜でもよいの」と「マギー」が言ふ。

老「糖蜜なんかありません」と老婆は腹立たし氣に言つて、老若の女同士、分らぬ言葉で頻りに對話してゐると、寐そべつてゐた子供が一人、パンと豚肉を引奪つて食べて終つた。「マギー」は心細くて、涙が出さうになつて來た。ジプシー達は自分の事なんか何とも思はぬらしいので、此處へ來た甲斐もなく思はれた。

やがて、男が二人戻つて來た、老年の方の男は、女共に大聲に小言を言ふと、女達も負けずに金切聲で口返答をする。マギーに吠へかゝる黑犬を若い方の男が呼び返して、其を擲る。「マギー」は、到底この仲間の女王になつて、益になる事を敎へてやる事なんか出來ないと語つた。男共は「マギー」の事を尋ねてゐるらしく、此方を見ては、何か言つて、「マギー」の衣袋から出た種々の品物を手にして、其中の銀の指拔だけを取つて終ひ、それから、さつさと肉と馬鈴薯のシチウを食べ出した。「マギー」は、ジプシーといふものは、成程盜賊に違ひない、「トム」が云つた通りだと思つた。指拔は、惜しくはないから呉れといへば遣りもしやうに、他人の物を斷りもなしに、我物にするやうな盜人の中に居ると思ふと、氣味が惡く身體が慄へるのを、老婆が見て取つて、再び丁寧な調子で、老「此御孃さんの上るものが何もないが、空腹いと仰るのに、之でも切めて召し上つて御覽」とシチウを皿に盛つて呉れた。先刻パンと鹽豚を厭だといつて怒られたので、「マギー」は又厭ともいひ

切れず、默つて居るのを、若い方のが、
女「御厭？　一口上つて御覽なさい」と勸める。
マ「イーエ、澤山。」と一生懸命の勇氣を出して、態と嫣やかに「もう暗くなりさうだから、宅へ歸ります。又、こんど來る時、御菓子や何か籠に入れて來て上げませう」と立ち上つた。
老「まあ〳〵御待ちなさい。御送り申ますから、大丈夫。御飯が濟むと馬に乘せて歸して上げますよ」と老婆がいふ。
眞實ではなかろうと思ひながら、「マギー」がまた坐に着いて、待つて居ると、背高娘が驢馬を曳き出して準備をし出した。若い方の男が出て來て「マギー」を馬に乘せ、若い女が「御帽子」といつて被せてくれて「皆がよく世話をしてくれたと御宅へいつて仰いね。いゝ御孃さんだと賞めたつてね」と言ふ。
マ「エ、あり難う。いろ〳〵御世話になりました。あなた一所に來ると可いのにね」と「マギー」は言つた。恐ろしい男と只二人行くよりも宜いし、途中で殺されるとしても、人の多い方が宜いにと思つて。
女「あなた私が一番好きですね。でも私行かれませんの。とても追付いて歩かれないから」
若い男も同じ馬に「マギー」の後ろへと乘つて行くらしいので、「マギー」は、世にも恐ろしい事だと思つたが、拒む勇氣もなくて、其儘入日の赤く射す頃を、只二軒しか家のない小道を搖られて行く中に、嬉しい事には、その淋しい道も盡きて廣い通りに乘合馬車が通つてゐるのが見えた。ではジプシーは眞實に宅へ連れていつて呉れるので、此人は善人なのだろう。自分が此男と來るのを厭がつて、氣の毒だつたと思ふ。次第〳〵に見覺えのある路へ出て來たので、「マギー」は此男に話しかけて御禮をいひ、自分の臆病らしかつた擧動を取繕らうと思つてゐる程に、四ッ辻で彼方から馬に乘つて來る人の姿が目に入つた。

マ「あれ〳〵御父さんが！　御父さん、御父さん！」と呼んだ。嬉しさが思ひ掛けなくて、「マギー」は泣き出した。父親の驚きは非常で、一體どうした事かと、馬を停めて訊ねる其間に、「マギー」は驢馬から滑り下りて、父の鐙に走り寄つた。ジプシーがマギーは道に迷つて自分達のテントに見えたから、送り届けに來たので、一日歩きまはつた揚句に、なか〳〵の骨折だといふので、父親は、五志をジプシーに遣つて返し、マギーを馬に乗せて家路に向つた。途中て自分に寄り縋つて泣いて居る娘に、

父「如何したのだ、エ？　如何して一人で歩きまはつて迷子になつたのだ」と訊ねた。

マ「御父さん、私逃げたの。あんまり厭だつたから兄さんが大變怒つて居るのですもの。辛抱が出來なかつたの」

父「何だ！　何だ！　御父さんの處から逃げるなんて、不可ないよ。御前が居なくなつたら、御父さんは如何すると思ふ」

マ「もう〳〵逃げないわ、必然〳〵」

その晩、父親は嚴然と、家内の者へ、思ふ處を言ひ渡したと見え、「マギー」は母からも、「トム」からも、一言半句でもジプシーの處へ逃げた事に付いて、小言も嘲弄も聞かされなかつた。「マギー」は、常ならぬ此所置に、却て恐れをなして、あんまり自分の行が惡いので、皆が呆れて口にも出さぬのだろうか、と時には思つた。（終）

（これからトムとマギトが成人していよ〳〵此小説の本領に入るのですが茲では子供としてのトムとマギーの事に止めて置きます。）

恐ろしき疫痢

醫學士　石塚保吉